

荷風文学

近代作家
研究叢書

24

日夏耿之

近代作家研究叢書24 監修・吉田精一

荷風文学

1984年2月25日第1刷発行

1990年1月30日第4刷発行

著者 日夏耿之介

解説者 柘植光彦

発行者 高野義夫

印刷所 モリモト印刷株式会社

製本所 東和製本株式会社

発行所 株式会社日本図書センター

東京都文京区大塚3-4-13

電話03(947)9387 振替東京2-8206

落丁・乱丁本はおとりかえします。 定価3,605円(本体3,500円)

ISBN4-8205-0334-0 C1395 P3605E

日甘久秋人春荷尔
文思于今他心理论集
内昭味二十五平书
都三笠重序仅

壹

予、永井荷風壯吉氏が製るところの文を嗜讀して己に業に四十年に餘る。しかも彼の翁に就て一冊のモノグラフをも梓に上すに到らなかつた。事は信に遇然なる而已。しかも情は決して遇然でない。

原來、予の專家として世に立つや詩を本意となし、心を東西古文の研考に傾注し來つた。時代は汪洋としてひろきのみ。國の自他近遠をば問はない。元よりもつとも心窄き予は、古典のうちから吾が興味に勝へうるもののみを抜いて究尋し來つたのである。予は曾て二十數年懇ろに某私立大學から請はれて教鞭を執つたが、當初予は、

詩を作る心情が、かの貧寒なる私立教員生活の埒に入つて、時間の大部分を奪はれ、詩興の挫折萎絶のために自ら消え失することあるを心のうちに惧れた。心ある友は來りてその非を上げて、予に忠言を試みた。しかし事情は已に辭する能はざるものが存したのであつた。果して憂慮した如くにして、かくて二昔餘りは石火の間に経過した。紅顏豐頬の少者も瘦軀斑髮の老者となり果てる時のすゝみであつた。敗戦の二日前、事を構ふる妄人の軍閥を笠に着たる不軌の企てあるを看取し、はやく此方から彼等の羅織構陷に應じて、その私大を退いて蕭然江湖にさすらふる閑適の身とはなつた。その學校は昔から待遇の刻薄を以て聞する所であつたから、予は賣講の人から賣文の徒に轉じて、ボラがイナに戻つたほどにも感じなかつた。

ので、予は江湖草澤の間に潜んで、退筆を呵して詩をひさぎ文を賣つて、病弱の老軀を養はむとした。

さて予は賣文賣詩の輩に伍し、ふみ屋の主のかはるがはる來り覓むるまゝに、文を綴り句を案じ歌を作した。しかし職分とする所は一句も公けにしなかつた。實はまつたくなかつたわけではないが、かかる賤劣俚卑の世、殘忍卑屈の國の人々に、予の自ら信ずる所いささかないではない詩作をば、路上のふかし芋の如くに見てもらふことをば欲しなかつたのである。かれらから詩を賣うして活を爲す者と見られるには勝へない情があつたのである。そこで専ら多く文を作つた。文は主として三代の文品を旁批することである。予は現代作者の小説といふものは幾んど見てゐない。極めて少數の氣骨溫情あ

る人が、丁寧に故ら贈致してくれた小説集ならば、時に研を撫し晝を品する閑に手にとつて見ないこともないが、それでもそれによつて文を立てる氣には却々ならない。時として氣まぐれに讀む雑誌の小説といふものは、予は作者名に構はずに讀むので、幾んど名を覚えなないのである。批評など月評子に任せておいてよろしからうと考へてゐるのである。大才は百世にして出づべし。予は大才大器の辛苦になる詩文の評品のみを事とし、且又その中でも心から予の好める風格の人の佳品のみ勝手氣儘に、わが情に溺れずに、又その人の世評に媚びることなしに、旁若無人に白を白となし、赤を赤となすごとくに判正することを以て楽しみとするのである。少くとも職業的操作に伴ふ生業の苦みよりも、趣に生き價值に即するわざにたづ

さはる刻々を自覺しての怡びの方が予には多かつたことは否めなかつた。かくして鷗外文學一卷がはつかに成つた。露伴の書亦次いで出づるであらう。鏡花一葉の書も踵を接ぐであらう。才が小さくない作者でも、人物として下卑た癖のある者の上には題品を試みたくはない。予の品藻は予の創作である。日本といふ國は、文學の創作ばかり認めて、文藝批評をば、創作とも文學とも認めてはならぬやうな不可思議な國である。予は創作と考へて批評の筆を執り、大才あり且予の好める品格の人物のみの上を題品し來つた。荷風小史も亦、まことにさういふ少數簡選のギャラクシイの一團の成員であつたこといふまでもなかつた。

頃ろ戦後を境にして、不思議にも荷風文學が大に市に行はれ、陌

上の子女争つて蟻子の甘きにつく如く求めた。今までこの叟について事毎に白眼を以て深讐のごとくに對した批評家へむしろ正確に言へば月評家は、顛倒してあわてふためき、筆を偏奇館主が上に就て染めた。專書すらすばやい記聞文學の先生方の手によつて市に出たやうすである。かうなると、もと高踏して俗文壇の外に出て文を行り詩をなしたが故に好きでもあり、その立場を最も藝術的に巧用した藝術家であつたが故に好きであつたのに、予はもはや予の喜む荷風書屋主が上を書く氣もなくなつた。雅に俗が自然にでも染み入ると、揣らず情が汚れるおもひがするのである。予はいままで相當荷風文學に就て品度したが、まだ言ひのこした部分が多い。それらを論じ悉して、荷風永井壯吉といふ存在を通じて、予の文學論を世

に正し、併せて時勢と國家との心理を評品したかつたのである。が一旦心がそびれると、予のごとき性情の者は、たやすくもとの框には戻らない。

しかも評下の對象となつてゐる作品に就てみると、この敗戦を境目にして、作者の心法心匠に非常な變化變動が看取された。情が荒んだことは、敗戦國の民人我れ人ともに多少とも然るのであるからいふまでもないが、その玉のごとき文品にいく分は罅が入つたけはひが何とはなく感得せられた。しからば之は忍びがたい。戦後の公けにせられたものは、斷簡零墨といへども人を派して入手して讀み悉してみたのだが、遇目するもの多くそのふしがいく分はあつた。予にとつては洵に残念至極この上もない。

併しながら、世上がこの人を凱旋將軍の如く迎へたのは、ただ賣文の士と版元との合作の感覺が圖星に中つて、戦後色情文學の氾濫の風潮に、荷風文學のボォノグラフィック調を乗せむと圖つたことが効を奏したのにすぎなかつた。荷風文學に似て非なる漁色譯詩文まで敗戦直後大にもてはやされて、俊敏果敢なる譯者爲に朱屋畫樓に栖む身とはなつたといふ街童の噂も聞いた。そんな些末事はどうでも可い。荷風文學が頽落しては、この上この土に在つて心寂しいことは無い。露伴下世後、予にとつて外に新板本の進んで購ふべきものが一種もなくなつてしまふからである。予は慙然としてしまつた。爲方がない。明清の雅人傳か、英吉利のニュウゲイト・カレンダでも讀んでゐよう。

モリス・ドニが第一世界大戰後、急にその畫境畫因の荒殘を來したことがあつた。あのやうな靜謐そのものの境致に安住した佳き畫人にまで、呪ふべき戰爭はかくの如き影響を與へるのである。荷風文學の荒廢も、あるひは畫人ドニとおなじ情に出るものであらうか。

予が抑も亦荷風小説を品し初めた動機には、かくの如き清尙孤高の文字を、一人でも喜む者多かれといふ成心が相當つよく作らいてゐたのである。しかるに今、街頭の犯々女子や無學な政治家まで手に取つて事さやぐに至つては、流布も底を衝いたので、もはや予の如き幽栖の迂儒までが品第の筆を故ら染めるには及ぶまい。予は左様に心のうちに考へた。人はなほ荷風小説の流行に乗じて、予をして評言を盡さしめむと欲して茅屋の扉をたゝいた。予は時に否み、

時としては應じなければならぬはめに陥つてしまつた。予は心に大に畏れた。かくては予の荷風論も、些しも予のたのしみではなくなつてしまつたからである。荷風は何が故になくなつたか。時代の罪か、性情の弱みか、藝術の宿命か。

しかるに、更に荷風文の叢間ふかく入つて讀み返してみると、曩きに予が荷風文章にひびが入つたと感じたのは、その比の一時の印象であつて、その印象の實感に錯りがあつたのではないが、事に神經質なるや、予は好める文章の味感にあたつては、助字句讀の末節にわたつて、殘忍なまでにその作者心理のうごきの高下の品等を檢し悉さねば駄目なものである爲に、たまたま敗戦に詩人の心うごき、三たびまで天火に會うて逃げまどうた擧句であつたので、追が七十

年來築き上げたる方寸の靈臺に投げやり棄鉢粗莽のうごきが多かつたのであらう。それをいちはやく受感して、劈痕氷裂の生じたるおもひがして情けないことに考へたのであつたが、全體としては依然として昔なつかしき荷風小史ゆかしき偏奇館の主であるのが判明して、遂に落した堆朱の指輪がめつかつたやうに予はうれしかつた。予は昔の心の絲筋に今のそれを繫^かけて、つひに荷風文學書一卷を編むで、書肆のひたすら執拗なる求めに應じることにした。

貳

予惟ふに、批評家の批評といふものは、しばしば基礎學醫の臨床

沙汰のやうなもので、崖言は忘れぬが、身に投薬の覚えが乏しいから、心でその弱處を惧れて尻込みし、言掠や假言や傍語に神經をつかつて、却て慘めに星を外れたる醫案を就することがすくなくない。

又謂ふに、創作家の批評といふものは、原來板橋街道をながす馬車馬が口をきく氣焰のやうなもので、永年見慣れ歩き慣れた道筋三尺の知見に憑る外に、それと商量比較するひろくふかい知識は一向に貧しいから、物言ふことが、如何に公平をよそほつても、ともすれば心窄くて獨斷で頑なであるに拘らず、猿利根にも自分が創作家としての場合での手きびしい反應を惧れて、要らざる世辭愛ぎやうのやうなものまで、豆に書き添へる如才を怠らない厭味が着き纏うてゐるキズがすくなくない。

左様におもふわたくし自身は、詩歌の創作家として批評を傍見し、批評家として創作を見据ゑるやうな場合のことある時に、揣らす雙方の弱處を悉くさらけ出して、筆つけに當つて年甲斐もなくおそろしく途まどひしたり、印象を正視してその「物」をその「場」に置く心構へにおびえたりするやうな不惻の陋態を示はすやうなことが尠くない。之はこの踏み入り易い缺陷に對し、原來弱氣な傍見者としてその本情を已に夙く知悉する處が多いので、その自覺が輪をかけるからでの結果であるらしい。

今の世に於て、批評は制作の副であり従である事わけが、制作が情に多く起つて一般衆人により、判り易いさがの文辭であり、従つて理に據るさがの文事である批評に較べて、常に何となく物に豐饒の

印象の位置にあるといふ事實に基くといふことは、一時のおもしろい現象であると理解してもよろしく、文化としての文學の假染のめじめな情態であると思倣してもよろしい。事は、對象人のけじめが元であつて、しかも大衆の物質性が知性の上におそろしく不當にのしかゝつてゐる今日のことであるから、凡そ大衆の暴虐と惡平等といふ二つの留目すべき現代的事實に就て關心を怠らぬ明智の人々が、特にこの事には一應耳を傾けておいて可いとおもふ。

永井荷風氏、江戸文士の墳域に詣でてうたゝ感あり。苔むす墓石を叩いて謳うて言く、

現代文士の研究は

君知らずや